

役目を終えた悪役令息は、第二の人生で呪われた冷徹公爵に見初められました2

### カーナ・オルフィーノ

オネアゼア国からやってきた  
見目麗しい聖女。  
どうやら何かを  
たづねているようで……？

### カーティス・ハウエル

ハウエル公爵家の現当主。  
天然気味なところはあるが、  
真面目で紳士的。  
寡黙で無表情だが、  
ダリルには優しく甘い一面を見せる。

### ダリル・ハウエル

悪役令息に転生した元日本人。  
もともとはハウエル公爵家の別邸で  
使用人として働いていたが、  
カーティスと両想いになり、  
今は彼と幸せに暮らしている。

### レイラ・ハウエル

カーティスの異母妹。  
明るく朗らかな性格だが、  
体が弱くあまり社交界に  
姿を見せない。

### ネイト・コッド

ダリルの異母弟。  
重度のブラコンであり、  
ダリルが結婚してもなお彼を  
溺愛して止まない。

### カイル・ハウエル

ハウエル公爵家の嫡男。  
顔の痣のせいで人間不信だったが、  
ダリルとカーティスと過ごすうちに  
痣が消え自信を取り戻した。

Characters

目次

役目を終えた悪役令息は、第二の人生で  
呪われた冷徹公爵に見初められました2

7

番外編①

アドレイド辺境伯邸にて

245

番外編②

リシユラ国旅行

297

役目を終えた悪役令息は、第二の人生で  
呪われた冷徹公爵に見初められました2

「單刀直入に言います。——カーティス様と別れてくれませんか？」

向かいのソファに座る聖女——カーリーナ・オルフィーノは、たおやかな微笑を浮かべながらダリルに言った。その余裕は、まるで正妻が夫の浮気相手に別れを促すかのようだった。

ここはハウエル公爵邸の応接間で、ダリルこそこの屋敷の家主、カーティス・ハウエルの正当な配偶者に違いないのだが、彼女があまりにも堂々とした態度で不遜な申し出をするので、すぐに言葉返せなかった。

そんなダリルに、カーリーナはくすりと笑った。

「そんなに驚くことはないでしょう？ カーティス様にとってどちらが必要な存在かは明らかですわ」

そんな簡単なことも分からないのか、と言わんばかりの嘲笑を含んで言われ、ダリルの腹の底にカッと怒りの熱が湧き上がる。

しかし彼女の言葉がまったくもって間違いいではないので、反論できない。今、カーティスが彼女の力に頼らざるを得ない状況なのは紛れもない事実なのだ。

下唇を噛んで俯くダリルに、カーリーナはわざとらしく溜め息をついた。

「まあ、別れないならそれでも構いませんよ。……カーティス様の命より、ご自分の気持ちのほう  
が大事なのなら」

ダリルの葛藤を嘲弄するかのようカーリーナは意地悪く微笑む。悪魔のような言動にもかかわらず、窓から降り注ぐ日差しが彼女の美しい白銀の髪を撫でて、一層神聖な煌めきを醸し出している。もし、事情を知らぬ第三者がこの場面だけを切り取って見たとしたら、多くがこう見なすだろう。愛する者を自身の能力で救う健気な聖女と、愛する者の命よりも自分の欲を押し通す欲深い伴侶だと……

\*\*\*

「ん……」

カーテンのわずかな隙間から朝の光が漏れ入り、ダリルはゆっくりと瞼を開けた。そしてすぐまた睡魔に負けて瞼を閉じたが、完全に目をつぶりきる寸前で、ハッと目を覚ました。

（いや、寝てる場合じゃない！ 今日はいカイルが帰ってくる日だ！）

寝ぼけた頭を叱咤して、ダリルは上半身を起こした。

妹が書いた小説『薔薇色の君』の世界に転生したダリルは、かつて物語に登場する悪役令息

だった。

人を傷つける言動には強い抵抗があり、本来の展開を避けようと奔走した彼だが、物語に逆らうたびに時間を戻され、何度もやり直しを強いられていた。

そんな中、過去のやり直しで異母弟のネイトを死なせてしまったダリルは、ついに悪役としての責務を全うする覚悟を決め、徹底して悪役令息を演じきりついに断罪されたのだった。

婚約を破棄され、実家から勘当され、学園を追放されたダリルが行き着いたのは、ハウエル公爵家の別邸。

公爵夫人の全身に痣が広がり謎の死を遂げ、さらに二年後には息子にも同じ痣が現れたことから人々はハウエル公爵家が呪われていると噂し忌避するようになっていた。

そこで使用人として働き始めたダリルは、顔に痣を持ち、心を閉ざしていた公爵令息カイルと出会う。少しずつ彼と心を通わせるうちに、カイルの実父であるカーティスとの親子関係を取り持つようになったが、ひよんなことからカイルが全寮制のアリシア学園に入るまでの一年間、カーティスと期間限定の結婚をすることになった。

三人で過ごすうちにカイルの痣は次第に薄れ、やがて完全に消えた。長年彼らを苦しめていたものがなくなり、ようやく心から笑い合える日常を手に入れたのだった。

カイルが無事にアリシア学園へ入学し、すべてが落ち着いたように思われた矢先、今度はカーティスから「伴侶として共に生きてほしい」とダリルは正式な求婚を受ける。

カーティスのことを恋愛的に見たことがなかったダリルは最初こそ戸惑っていたものの、その後

カーティスと過ごすうちに彼の真摯な想いに心を動かされ、ついにその求婚を受け入れた。

こうしてダリルはカーティスの伴侶となり、共に新たな一步を踏み出したのだった。

(三人一緒にこの屋敷で過ごすの、どのくらいぶりだろう)

ダリルは記憶をたぐりながら、頭の中でおおよその日にちを数える。

カイルがアリシア学園に入学して、十ヶ月が経った。アリシア学園の生徒は学生寮に入るのが基本だが、成績優秀者には学年末に一ヶ月半の長期休暇が与えられるのだ。

長期休暇という帰省する絶好のチャンスが手に入るのだ。カイルが張り切らないはずがなかった。聞くところによると、ダリルの弟であるネイトのところまで教わりに行くこともあったそうだ。

もともと優秀な上に努力をした結果。カイルは学年上位の成績を修め、無事、長期休暇を獲得したのだった。

相当に嬉しかったのだろう、そのことを報せるためにダリルを学園に呼び出したほどだ。胸を張って長期休暇許可証をダリルに見せるカイルのことを思い出すと、微笑ましさで心が温かくなる。

カイルが本邸に到着するのは、昼過ぎの予定だ。まだもうひと眠りしても十分間に合う時間だが、食後に手作りの焼き菓子を出そうと、昨日ダリルは材料を買っていた。

カイルが帰省するというので、厨房はいつも増して忙しくなるだろう。そんな中、自分の勝手で厨房の一角を占拠するのは憚られる。だから、早めに下準備しておこうと思ったのだ。

もちろん、この屋敷の主であるカーティスの伴侶となったダリルがそのような気を遣う必要はな

い。だが、別邸で使用人として働いていた時期もあり、彼らの大変さもよく知っている。だから、なるべく仕事の邪魔になることはしたくなかった。

そういった気遣いが使用人たちの間では好評で、関係も良好だ。カイルに手作りの焼き菓子を作ろうと思っていると話した時など、料理長自らレシピをアレンジしてくれたほどだ。

(とりあえず、顔を洗って服を着替えよう)

早く身支度を済ませて厨房に行かねばと、ベッドから出ようとした時、隣から伸びてきた手に腕を優しく掴まれた。

その手の主が誰かは分かっている。ダリルは自分を掴んで止めるその腕の主を視線で辿って、微笑んだ。

「おはようございます、カーティス様」

「……ああ、おはよう」

眠りからまだ覚めきれしていないカーティスが、気だるげに挨拶を返す。どこかあどけなくすらあるその表情が可愛らしくて、ダリルはくすりと笑みを漏らした。

カーティスは朝に弱い。以前、三人で別荘に泊まりに行った際、寝起きにカイルと間違えてダリルに抱きついたことがあるほどだ。その時に朝が弱いのは薄々感じていたが、ベッドを共にするようになってそれは確信に変わった。

いつも隙のないカーティスが見せる意外な一面。こんな表情を知っているのは恐らく世界で自分だけだろうと思うと、嬉しくて堪らなかつた。

「もう、起きるのか……?」

問いながら、ダリルの腕を軽く引く。言外に、まだ一緒に寝ていようと言っているのだ。自分より年上でしつかりしているカーティスが滅多に見せない甘えるような仕草に、胸がときめく。

何もなければすぐにベッドに戻るところだが、生憎今日はそうはいかない。

ダリルはカーティスの手にそっと自身の手を重ねながら、優しく言った。

「今日はカイルが帰ってくる日ですから」

「帰ってくるのは昼だろう? まだ時間はある。もう一眠りしてもいいだろう」

食い下がるカーティスに、ダリルは苦笑を向ける。まるで子供のような頑なさか微笑ましい。

「カイルに焼き菓子を作ってあげようと思っっているんです。だからそろそろ準備しないと」

「そうか……」

息子の名前が出ると、さすがにカーティスも手を引いた。しかし、その表情はどこか不満げだ。

「焼き菓子ができあがったら一番にカーティス様のところに持っていきますね。味見をお願いします」

拗ねる子供をなだめるように優しく言って、ダリルはベッドから腰を浮かす。しかし、カーティスが再び腕を伸ばしてきて、今度はダリルをベッドの中に引きこんだ。

驚いて顔を上げると、カーティスと目が合う。カーティスは一瞬、目を逸らしたが、すぐにダリルを真っ直ぐ見つめ、口を開いた。

「……その焼き菓子をを作るのは、カイルが来てからではダメか?」

「え？」

思いがけない言葉に、目をパチパチと瞬かせる。カーティスは頬を赤く染めながら、恥じ入るように眉根を寄せて言葉を続けた。

「カイルが帰省している間、君はきつとカイルにつきつきりになる。もちろん、父親としてはカイルを可愛がってくれてありがたい限りだ。……ただ、君の夫としては、少し寂しい」

そう言うと、カーティスはダリルをぎゅつと抱きしめた。

「大人げない自覚はある。だが、君をもう少し独占させてくれないか」

そう言うように言って、片手でダリルの髪を掻き上げるようにしながら後頭部を包みこみ、耳元で切なげな吐息を落とす。

その湿った甘い吐息が、昨晚の情事の記憶を否応なく蘇らせて、頬が熱くなった。カーティスにここまで言われて、断れるはずがない。

それに、愛するカーティスの温もりを感じながら起き抜けの微睡みに身も委ねるのは、ダリルにとつても幸福で、かけがえのない時間なのだ。断る理由もない。

「……そうですね、焼き菓子はカイルが帰ってからでも作れますね。何なら一緒に作ってもいいかもしれません」

言いながら、カーティスの背中に腕を回す。胸に顔をうずめ、息を深く吸いこんでカーティスの匂いを堪能すると、再び顔を上げた。

甘やかに視線が絡んで、どちらともなく唇を重ねる。

確かにカイルが帰省している間、こうしてキスをする機会は減るだろう。そう思うと、カーティスの体温を感じている傍から恋しさが募って、一層口づけを深めた。

\*\*\*

「お父様、ダリル！」

カイルは馬車から降りると、玄関前で出迎えるダリルとカーティスに満面の笑みを浮かべて駆け寄った。

「おかえり、カイル。見ない間に、少し背が伸びたんじゃないか」

頭を撫でながら、カーティスが少し驚いた顔をする。

ダリルは定期的に学園に面会に行っているが、ハウエル公爵家当主で多忙な身であるカーティスはそうもいかない。手紙のやり取りはあったようだが、会うのは保護者懇親会以来だ。驚くのも無理はない。それほどまでに子供の成長は早いものだ。

「ふふっ、今はクラスで三番目に大きいんですよ」

カイルは子供らしい無邪気さで、得意げにそう言った。身長は伸びたが、笑顔はまだ年相応のあどけなさがある。その笑みは、出会った時のものとまるで別人だった。

出会った当初、大人びていると言えば聞こえはいいが、すべてを諦めきっているようで、その姿がひどく胸を締めつけたのを、ダリルは覚えている。

もちろん、今でも大人びてはいるものの、ダリルやカーティスの前ではこうして子供らしい無邪気な表情を見せるようになった。そのことがダリルは嬉しく、カイルの笑みを見る度に、胸に温かな感情が満ちるのだった。

「もしかすると、本当にお父様の背を追い越してしまうかもしれないね。でもまずは、ダリルが先かな。来年くらいには、追いついていくかも」

悪戯いたづらつぼく笑いながら、カイルはダリルへ水を向ける。彼らしい冗談に、ダリルは小さく笑った。「来年はさすがに早すぎだよ。でもこのままいくと、本当にすぐ追い抜かれそうだなあ。背が伸びたかっこいいカイルも見たいけど、まだもう少しは可愛いかイルでいてよ」

そう言っ頭を撫でると、カイルは途端に顔を赤らめた。しかし、すぐに赤くなった顔を隠すようにそっぽを向いて「ま、まあ、しばらくは背を伸ばさないようにしてあげるよ」と答えた。

そのとっさに出たであろう素直でない、しかし同時に子供らしい反応に、ダリルとカーティスは顔を見合わせて微笑んだ。

その無言の会話にカイルが目ざとく気づく。

「あ、今、二人だけで、目で会話しましたね？ まあ、二人の仲がいいことは僕にとっても嬉しいことですけど——」

カイルは言葉を途中で切って、間に割りこむように二人の腕をぐいっと抱き寄せた。

「今日からは僕もいることを忘れないでくださいねっ」

語気を強めて言いながら、それぞれの顔を下から覗きこむ。むくれた表情をしつつも、目はまぶ

しいくらいに笑っていた。

「もちろん、忘れるはずない。ダリル君と二人でカイルの帰省をどれだけ楽しみにしていたことか」

「そうそう。いくら忘れっぽくても、カイルのこと忘れるなんてあり得ない」

「それならいいけど」

カイルは満足そうに言っ、笑みを深めた。

「そういえばカイル、今何か欲しいものはあるか？」

「え？ 欲しいものですか？」

唐突にカーティスから訊かれ、カイルは大きな目をパチパチと瞬かせた。カーティスはそんなカイルを穏やかな眼差しで見下ろしながら頷いた。

「ああ、勉強を頑張ったんだらう？ だから何かご褒美を買ってあげようと話していたんだ」

「それでいろいろ二人で考えたんだけど、いい案が出なくて。だからもうこれは直接カイルに訊こうってことになったんだ。サプライズ感がなくて申し訳ないけど……」

ダリルは苦笑しながら頭を掻く。

カイルの帰省が決まった日から今日まで、二人で何度か街に足を運び、カイルへのプレゼントを見て回ったのだが、なかなかピンとくるものが見つからなかった。最終的に、ご褒美ということであればカイルが確実に喜ぶものがいだろうという事になり、直接本人に訊くことにしたのだ。

「ご褒美かあ……。うーん、特に今これといって欲しいものは——、あ！」

顎に手を当て考えるカイルだったが、突然、小さく声を上げた。

「ちなみにご褒美って、物じゃなくてもいいんですか？」

「ああ、もちろんだ」

カーティスが頷くと、カイルは言質を取ったばかりに、にやりと目を細めた。

「それじゃあひとつ、お願いがあります」

含みのある言い方で前置きをして、カイルは「お願い」を口にした。

\*\*\*

カイルが帰省してから三日後、一台の馬車が屋敷の前に止まった。

馬車から降りてきた青年の、相変わらず美しいその黒髪に、思わずダリルは目尻を下げた。

「いらつしやい、ネイト。久しぶりだね」

「……っ、兄さん！」

ダリルの姿を認めた途端、ネイトの瞳がパツと輝く。そして次の瞬間には、その胸に飛びこまんなばかりの勢いでダリルに抱きついた。

隣に立つカイルがやれやれと肩をすくめる。

「ちよ、ちよと苦しい、苦しいよ」

「ごめんごめん。久しぶりに兄さんに会えた喜びが溢れ出たっ！」

ダリルがぼんぼんとネイトの腕を叩くと、彼は謝りながら腕の力を緩めたが、体を離す気配はなかった。

「いやあ、それにしてもこれからしばらく兄さんと生活できるなんて夢のようだよ。これも全部カイル君のおかげだ、ありがとう」

ネイトが上機嫌で礼を言うと、カイルは小さく溜め息をついた。

「約束しましたからね。僕の勉強を見てくれる代わりに、帰省できることになったらお礼にネイトさんを屋敷に招くって」

「ああ、だからカイル君が成績上位者になれなかったら、絶対に許さなかったよ。死ぬまで一生恨むつもりでいたからね」

にこやかにとんでもないことを言うネイトだが、恐らく冗談ではないだろう。

カイルがネイトに勉強を教わっていると聞いた時は、きつと歳の離れた兄弟のように仲良くしているのだろうと微笑ましく思っていたが、実情はなかなかシビアな利害関係だったようだ。

「成績発表日に初等部ホールまで成績順位表を見に来たネイトさんを見た時は、自分の目を疑いましてよ……。ところで、ダリルにくつつきすぎじゃありませんか？ そろそろ離れてください」

ダリルの手を引っ張り、カイルが二人を引き離そうとすると、ネイトがムツと眉根を寄せる。

「いいじゃないか、久しぶりの再会だ。カイル君は僕より三日早く兄さんに会って十分甘えただろう。次は僕が甘える番だ」

「あなたは一体自分を何歳だと思っているんですか」

「歳なんて関係ない。僕はたとえ百の老人になっても兄さんに全力で甘える」

女性なら誰もがときめきそうなキリッとした表情でネイトが言い切ると、カイルは大きく溜め息をついた。

「ダリルのことが絡むと本当に別人になりますね。学園じゃ下級生の憧れの的なのに……。残念な人だ」

「残念で結構。兄さん以外の人間に好かれたところで何も嬉しくないからね」

「……ダリル、一体どんな育て方したらこんな風になるの？」

「はははは……」

呆れ返った視線を投げられ、ダリルは苦笑いするしかなかった。

「――すまない。出迎えが遅くなってしまった」

不意に後方から声が聞こえ、三人でそちらを振り返る。

カーティスが玄関からこちらへ向かってきていた。

ネイトの目がかすかに剣呑さを帯びる。しかしそれも一瞬のことで、すぐに品のある秀麗な笑みを浮かべた。そしてダリルから体を離すと、スツと姿勢を正した。

「とんでもございません。この度はお招きいただき誠にありがとうございます。お初にお目にかかります。私、ネイト・コッドと申します。以後お見知りおきを」

胸に手を当て礼儀正しく挨拶するネイトを見て、ダリルはホッと胸を撫で下ろした。

ダリルがカーティスの求婚を正式に受けると報告した際、ネイトは余命宣告でもされたかのよう

に絶望的な表情を見せ、カーティスに対する憎悪と敵意を剥き出しにしていたので、実は少し心配していたのだ。

（そうだよな、いくらネイトでもカーティス様に噛みつくような真似はしないよな）

表面上は取り繕ってけていることに、ひとまず安心した。

「こちらこそよろしく。学園では勉強を見てくれたり、相談に乗ってもらったり、いろいろとカイルを気にかけてくれてるように、感謝しているよ。ありがとう」

柔和な物言いと丁寧な礼を言われ、ネイトは少し面食らったような顔をした。冷徹だという世間の噂から受けるイメージと随分違うためだろう。

しかしすぐに「いえ、とんでもございません」と微笑んで返す。

「むしろ、私のほうこそハウエル公爵には感謝しております。勘当され、後ろ盾のない兄のことが心配でしたが、学生の身である私にはどうすることもできませんでしたから……」

目を伏せ、うつすらと自嘲めいたものを口元に浮かべながらそう続けた。

その殊勝な態度で口にする感謝がどこまで本気かは分からないが、ダリルを心配していたことは確かだろう。そう思うと、改めてネイトにはいらぬ気苦労をかけてしまったと、ダリルは申し訳ない気持ちになった。

「ですから、兄に何不自由のない生活を送らせていただき、本当に感謝の気持ちしかありません」にわかに湧いた湿っぽさを散らすように、ネイトは朗らかに言った。そんな彼の様子を見て、ダリルだけでなくカーティスもホッと頬を緩めた。

「そう言ってもらえてよかった。直接の挨拶もなしに君の大事なお兄さんもらい受けて、恨まれているんじゃないかと心配していたんだ」

「滅相もございません。兄からハウエル公爵のご多忙さは聞き及んでおります。私に会うためだけに時間を割いていただくなど、かえって恐縮してしまいます」

軽くおどけて肩をすくめるネイトを見て、ダリルは驚きつつも、弟の成長ぶりに密かに感動していた。

(すっかり紳士になったなあ)

感慨深い気持ちでネイトの横顔を見つめていると、カーティスがぐすりと小さく笑った。

「兄弟水入らずで話したいこともあるだろう。滞在はいつまでも構わない。せつかくだから、食事の時間まで二人でゆっくり話すといい。カイル、こっちへ来なさい」

カーティスが視線でカイルを手招く。

ダリルと離れるのが嫌なのか、一瞬返事に詰まったが、すぐに「はい、わかりました」と言っただけでカイルはダリルの手を離す。そして、ネイトに厳しい表情を向けた。

「ネイトさん、言っておきますけど、三日早く帰ったとは言っても、まだまだ僕も甘え足りていませんから。独り占めのしすぎはだめですからねっ」

釘を刺すように強めに言うカイルを、ネイトもダリルも目を丸くして見ていたが、その可愛らしさい念押しに笑みが零れた。

「分かっているよ。カイル君は僕をここに招いてくれた恩があるからね。積もる話を少ししたらす

ぐにカイル君の部屋に行くよ」

「絶対ですよ」

カイルはそう言うと、名残惜しそうに一度ダリルに視線を向けてから、カーティスと共に屋敷の中に入っていった。

「――まったく、カイル君も人のこと言えないじゃないか。兄さんのことが絡むと別人になるのはお互い様だ。学園のみんなにも見せてあげたいくらいだよ」

ネイトが苦笑交じりに溜め息をつく。つられてダリルも苦笑した。  
(きつと大人びた態度で周りもたじたじなんだろうな)

ネイトの口ぶりに、カイルの学園での様子が容易に想像できた。もともとの性格もあるだろうが、ハウエル公爵家の人間として気を張っている部分があるのかもしれない。

(帰省中は存分に甘えさせよう)

ダリルは胸の内でもうかかずに、ネイトを屋敷の中へ迎え入れた。

屋敷を案内した後、カーティスの厚意に甘え、ダリルとネイトは応接間でしばらく歓談して過ごすことにした。

互いに一通り近況を話し終え、どちらともなく紅茶を口に運び一息入れる。

「それにしても、ネイトも丸くなったね」

しみじみとダリルが言うと、ネイトはきよんとした表情になった。

「急にどうしたの？」

「いや、だって正式に婚姻関係を結ぶって報告した時は、カーティス様に対して敵意剥き出しだったじゃない。だから、カーティス様と対面した時は内心ひやひやしてたんだ」

「当然だよ。本音をさらけ出して追い返されたら意味がない。……今回ここに来たのは、兄さんに会うためだけじゃないからね」

「え？」

ネイトが唇の端をにやりと意味深に持ち上げたので、ダリルは目を睜みはった。

「えっと、それはどういう意味？」

「決まっているだろ。今回の滞在中に、ハウエル公爵が兄さんにふさわしい人物か、この目で確かめるんだよ」

「ええっ！」

胸を張ってとんでもないことを言うネイトに、思わず大きな声が出た。

「な、何言ってるんだよ、ネイト。そもそも俺にふさわしいかだなんて、おこがましいよ」

むしろ家柄的に考えて、ふさわしいかどうか品定めされるのは自分のほうだ。しかし、兄に心酔しているネイトに、そんな一般論は通じない。

「兄さんこそ何を言ってるんだよ。兄さんほどの人物の隣に生涯伴侶として立ち続けるんだ。この目で見定めるのは当然だろう」

「……頼むから俺以外の前でそういうことは言わないでくれよ？」

身内びい鼻肩びいがすぎる過大評価に、ダリルは頭を抱えてしまう。

「まったく、兄さんは謙虚なんだから」

「いや、謙虚とかじゃなくて。よっぽど自分に自信がない限り、みんな同じこと言うと思うけど……」

「兄さんの慎ましい性格は美德だけど、時にそれは人を見る目を曇らせる。特に恋愛においてはね」

ビシッとダリルを指さし、ネイトはやや語気を強めて言った。そこまで恋愛にのぼせ上がっているつもりはないが、その妙な迫力に思わず怯ひむ。

「恋は盲目とも言えよう。だからこそ、第三者の僕がハウエル公爵を見定める必要がある」

指を下ろして、ネイトは再び紅茶を口に運んだ。その表情には、持論をすべて語り尽くしたかのような清々すがすがしさがあった。

「……それに、ちょっと気になる噂も耳にしたからね」

「噂？」

ダリルが聞き返すと、ネイトはちらりとダリルの表情を窺うかがうように視線を遣やって、紅茶をテーブルに戻す。

そしていつになく真面目な表情で「あくまで噂だけど」と前置きしてから声を潜めて話し始めた。

「ハウエル公爵がとてつもない美女と密会しているっていう話を聞いたんだ」

「え？」

深刻な雰囲気でも明かされた話に、ダリルはポカンと口を開けた。

普通、伴侶の不義を仄めかす噂を聞けば、多少なりとも胸がざわついたり不安になったりするものだろう。しかしダリルにそんな感情は少しも湧き上がってこなかった。それどころか、荒唐無稽な話を聞いたかのように小さく噴き出してしまった。

「ははっ、そんな噂があるんだ」

「笑い事じゃないよ、兄さん。確かにハウエル公爵は真面目そうだけど、真面目だから浮気しないとは限らないだからね。それに火のない所に煙は立たないって言うし」

危機感に欠けるダリルを咎めるように、ネイトは眉根を寄せてそう言う。

確かにネイトが言うことはもつともだ。しかし、ダリルにはどう頑張っても、美しい愛人と密会するカーティスの姿を想像できなかった。

それは決してカーティスが自分にベタ惚れだと自惚れているわけではなく、ただ単純に、彼にそのような不誠実な器用さがないことを知っているからだ。

それにハウエル公爵家当主であるカーティスは常に多忙だ。仕事内容は多岐にわたり、領地台帳や王室への報告書などの書類作成はもちろん、領地の視察や役人との会談など、挙げればきりが無い。ダリルもローマンに教わりながら書類作成を手伝っているが、大きな助けになっているとは言いがたい。

(情けない話だけど……)

ダリルは自身の至らなさを恥じ入りながら自嘲した。

とにもかくにも、多忙を極めるカーティスに、愛人と密会する暇などあるはずがないのだ。

「確かに火のない所に煙は立たないというけど、カーティス様の忙しさを目の当たりにしたらそんなこと言えないと思うよ」

しかも真面目な性格ゆえに、決して手を抜くことがない。見ていて心配になるほどだ。

だが、疑念を湛えたネイトの眉間の皺が消える気配はない。それどころか、樂觀的なダリルに不満げですらある。

「でも仕事柄、屋敷にいないことも多いだろう？ その時に噂の愛人と……ってこともあるかもしれないじゃないか」

ダリルに危機感を持たせようとしているのか、不安を煽るように声に抑揚をつける。

それでもやはり、ダリルにはいまいちピンとこない。むしろこんな話題が上がっていることが、せつかくネイトと話す時間をくれたカーティスに、申し訳ない気がした。

困って曖昧に微笑むダリルを見て何かしら察したのか、ネイトは場の雰囲気を替えるように大げさに肩をすくめた。

「まあ、僕が屋敷にいる間にしっかり見極めるから、兄さんは何も心配しなくていいよ」

「いや、その発言がすでに心配でしかないんだけど……」

口調に冗談めいた軽やかさは戻ってきているものの、噂の真偽を見極めるつもりでいるのは確かだろう。ダリルに関することになる途端に思考を暴走させてしまうネイトが、カーティスに無礼なことをしでかさないか、ダリルは気が気でなかった。

カイルが帰省して一週間が過ぎた頃、ダリルとカーティス、カイル、ネイトの四人は、ハウエル公爵家と古くから付き合いのあるクレア侯爵家の夜会に出席することとなった。侯爵夫人の誕生日祝いとのことだ。

幸いにもネイトも今のところカーティスに不躰な詮索をすることなく大人しく過ごしており、夜会にも一緒に行くことになった。

「ふう……」

夜会に向けて身支度を調えながら、ダリルは小さく溜め息を漏らす。

家族三人揃って夜会に参加するのは初めてのことだ。加えて、今日はその夜会でとある人物に会うことになっている。ダリルの緊張もひとしおだった。

鏡の前でネクタイを結び直していると、カイルが横からひよこりと覗きこんできた。

「やけに気合いが入ってるね。……もしかして、アドレイド大叔母様とレイラ叔母様に会うの、緊張してる？」

カイルが口にした二人の名前にダリルはドキッと肩を震わせた。

アドレイド・アルバーンは、カーティスの父の妹であり、カイルにとっては大叔母にあたる人物だ。子供に恵まれなかったアルバーン辺境伯家の養子となり、現在はその当主である。年齢は四十

手前だが、若々しく華やかな美貌の持ち主で、辺境伯家当主として辣腕を振るっているようだ。

レイラ・ハウエルは、カーティスの妹で、カイルの叔母にあたる。体が弱く、あまり社交界に出ることがないため詳しいことは知らないが、カーティスとは異母兄妹だということは噂で耳にしたことがある。

両親が早くに他界したカーティスにとってこの二人は最も近い身内であるが、ダリルはまだ顔を合わせたことがなかった。

法律上では婚姻関係を結んでいるダリルたちだが、式は挙げていない。もともと、期間限定の婚姻関係だったので、ダリルの今後なるべく影響を与えないように、カーティスが配慮してくれたのだ。それと同じ理由で、身内への紹介も控えてくれていた。

もちろん、カーティスとダリルが晴れて両思いになり婚姻関係が正式なものとなった後、アドレイドやレイラに挨拶をする予定だった。しかし、アドレイドは国境付近の動きに怪しい動きがあったのでその対応で忙しく、レイラは体調が優れず、なかなか顔合わせができなかったのだ。

二人とも今夜の夜会でダリルに会うのを楽しみにしてくれているらしいが、本心は分からない。いくらカイルやカーティスに頼まれた契約結婚だとはいえ、身内からすればダリルの印象はあまりよくないだろう。

しかもダリルは、一応侯爵家の出ではあるが、元使用人だ。契約期間中あらゆる手段を使ってカーティスを陥落させたのではないかと邪推されても無理はない。

それほどまでに、客観的に見ればダリルとの結婚はカーティスにとって何ら得はないのだ。

アドレイドやレイラがどんな人物かは分からないが、考えれば考えるほどダリルの中の不安と緊張は増していく一方だった。

「大丈夫だよ」

まるで心の内を見透かしたような言葉に、ダリルは驚いてカイルのほうを見る。カイルは目が合うと、ふっと目元を和らげた。

「きつと二人ともダリルを気に入るよ。なんて言ったって、この僕が認めたんだから」

どこか得意げにカイルが言うものだから、ダリルは思わずくすりと笑った。

「そう言ってくれると心強いなあ。ありがとう、カイル」

「まあ、ダリルは気の抜ける顔しているから、滅多なことでは敵意を向けられることはないよ」

「気の抜ける顔って……」

確かに息を呑むほどに顔立ちが整っているカーティスやカイルに比べれば締まりのない顔かもしれないが……

そう苦笑するダリルをちらりと見てから、カイルは肩をすくめるようにして軽く溜め息をついた。「安心しなよ。それでも万が一、二人がダリルに何か言うようなら、僕が守ってあげるからさ」

素っ気ない言い方だが、そこには絶対的約束を違え(たが)ないだろう誠実さが感じられた。素直でない、ある意味カイルらしい優しさにダリルは微笑ましい気持ちで目を細めた。

「ありがとう。頼りにしてる」

素直に礼を言うと、カイルは「子供を頼りにするなんてダリルらしい」とわざと嫌味っぽく言っ

て返したが、その顔は満更でもなさそうだった。

\*\*\*

クレア侯爵の屋敷に着いた四人を出迎えたのは、当主であるフィリップ・クレアと、本日の主役、レティシア・クレアだった。

瘦せ型で寡黙なフィリップに反して、レティシアはふくよかな明るい女性で、急遽参加することになったネイトも快く迎え入れてくれた。

「かっこいい殿方が増えるのは大歓迎！」

レティシアが朗らかに笑う。声も身振りも大きいのが、快活さの中に品があり、少しも嫌な感じがしない。きつとこの屋敷に訪れた人間の多くが、家門の付き合いだけでなく、彼女の人柄によって集まったのだらうと察せられた。

「ああ、そういえば、大事なことを忘れるところでしたわ」

軽い談笑を挟んでから、レティシアは傍のメイドから手籠を受け取り、にこにこ無邪気な少女のような笑みを浮かべた。

「ここからひとりひとつ紙を取ってください」

差し出されたその中から、ダリルたちは言われるがまま小さく折り畳まれた紙を選ぶ。

ダリルの紙には、薔薇の絵と数字の六の文字が記されていた。

「パーティーで使う大事なものですから、なくさないように持っていてくださいね」

「何に使うんですか？」

「ふふっ、それはあとからのお楽しみですわ」

ダリルの質問に、レティシアは何かを企んでいるような笑みでもって返したのだった。

「なんだろうね、これ」

ホールへ向かう途中の廊下で、カイルが冷めた目で手元の紙を見ながら呟いた。カイルの紙には小鳥の絵と数字の三が書かれている。

少し不機嫌なのは、「子供はこっちの籠かごよ」と子供扱いを受けたせいだろう。

「うーん、なんだろう……。あ！もしかして豪華景品が当たるくじ引きとか？」

「なんで誕生日を祝いに来た人間が物をもらう気満々なの」

呆れ気味に言われ、ダリルは途端に恥ずかしくなって肩をすぼめた。それを見咎めたネイトが、目尻を吊り上げ抗議する。

「何を！ 兄さんらしい無邪気な発想じゃないか！」

「や、やめて、ネイト。成人男性が無邪気はきつい……」

擁護されているはずなのにまるで追い打ちをかけられたような気持ちになり、堪たまたらずダリルは止めにかかる。そのやり取りを、傍らで見ていたカーティスが静かに笑った。

弟に庇い立てられる場面を見られ気恥ずかしくもあつたが、カーティスの笑みが柔らかく微笑ま

しげですらあつたので、ダリルは胸がくすぐつたくなった。

過保護ではあるが大切な自慢の弟だ。カーティスの笑みには、そんなネイトの存在ごと自分を受け入れてくれているような、温かな包容力が感じられたのだ。

ホールに入ると、アリシア学園の懇親会の時と同じように、貴族たちが次々とカーティスのもとへ挨拶に訪れた。

未だ社交界での挨拶に慣れないダリルは、ひっきりなしに挨拶に来る人々にすっかり疲弊しきっていたが、カイルとネイトは少しの疲労も見せずに実に堂々と応対していた。

人の波が引いたところで、カイルが手洗いに行った。ダリルと一緒にいて行こうかと言うと「ひとりで行けるよ」と子供扱いを不服とした様子で断られた。

ハウエル公爵家の従者、チャドがついているが、それでも遠く離れていく背中をつい目で追ってしまう。すると、ネイトが小さく溜め息をついた。

「兄さんも僕のこと言えないじゃないか。結構な過保護っぷりだよ」

「いやいや、俺とカイルじゃ歳が全然違うから」

「目が離せないのは一緒だよ」

肩をすくめながら言われ、ダリルはむくれた。

「目が離せないって子供じゃあるまいし……。カーティス様もそう思いませんか？」

振り返ってカーティスに賛同を求める。しかし、カーティスはすぐには頷かず、口元に手を当て

小さく笑った。

「確かに君は子供ではないが、カイルとは違う意味で目が離せない。……目で追ってずっと見ていたくなる」

愛おしげな眼差しを向けられ、ダリルの頬が熱を帯びる。言葉以上に饒舌な彼の瞳から甘い感情が伝わってきて、不意を突かれたようにどぎまぎした。

そんな甘い雰囲気を知ったネイトが、サツと二人の間に割り入る。

「本当にそうですよねっ、ハウエル公爵のお気持ち、すごく分かりますよ。僕もずっと兄のことは目で追ってききましたからね、子供の頃からずっと」

にこやかにカーティスの言葉に賛同しつつも、さりげなく自分のほうがダリルとの付き合いが長いことを誇示するネイト。しかし、幸いにもカーティスはその幼稚な対抗心には気づいていないようで「子供の頃のダリル君もさぞ可愛かっただろうな」と鷹揚たかやまに目を細めていた。

(なんか、威嚇する猫と、ゆったりした象みたいだな)

二人のどこか噛み合わないやり取りを聞きながら胸の内では苦笑していると、「やあ、カーティス。久しぶりだね」とカーティスに気さくに話しかける声が出た。

声のほうを振り返ると、男装の麗人といった装いの女性が、金色の長髪を揺らしながらこちらへ向かってきていた。隣には黒髪の小柄な女性を連れ立っている。

彼女のほうへ向き直ったカーティスの表情は、一見では分かりにくいながらも柔らかくなり、ダリルにはカーティスが彼女たちと懇意な関係であることが容易に分かった。

「お久しぶりです。アルバーン辺境伯」

「ははっ、お堅い感じは変わらずだが、だいぶ表情が柔らかくなったな。やはり結婚すると人は変わるものだな」

にやにやと茶化すように言いながら、男装の女性はダリルのほうへ視線を遣った。

「初めまして。君がダリル君だね。話はカーティスからよく聞いているよ。私はアドレイド・アルバーン、カーティスの叔母だ」

名乗ったアドレイドは、スツと手を差し出した。女性にしては少し低いのが、自信に満ちた張りのある声は、威厳と気さくさを兼ね備えていた。

「ダリル・ハウエルです。どうぞよろしくお願います」

差し出された手を取り挨拶すると、力強く握り返された。瞳こそカーティスと同じ赤色だが、彼とは違い豊かな表情がそこにはあった。

「ご挨拶になかなか伺えず申し訳ございませんでした」

「いや、こつちがいろいろ立てこんでいたからね。気を遣わせてすまなかったね」

辣腕らつたんを振るう女辺境伯という噂を聞いて、ダリルはアドレイドが厳しい人だと想像していたが、

思いの外、気さくでホツとする。

「ところで隣の色男は誰だい？ まさか間男なんてことはないだろうね」

「ち、違いますよっ」

明らかなかにかいだと分かっている、ダリルは慌てて否定した。

「紹介させていただきます。こちらは弟のネイトです」  
「ネイト・コッドです。どうぞよろしくお願いします」

緊張してぎこちないダリルと違い、ネイトは一步前に出て余裕ある秀麗な笑みを浮かべた。

「おやおや、若いのに随分堂々としているね。いい男になるに違いない。アドレイド・アルバーンだ、よろしく」

冗談交じりに褒めながら、アドレイドはネイトと握手を交わした。

「さて、私も妻を紹介させてもらおう。ダーラ」

「はい」

アドレイドに呼ばれて、隣の黒髪の女性が半歩前に入る。長身のアドレイドの隣に立つとその小柄さが目立つ。

「私の妻、ダーラ・アルバーンだ」

「どうぞよろしくお願いします」

愛想程度にも微笑まず挨拶をするダーラの声は、洗刺はうらちとしたアドレイドの声とは対照的に、囁くような細かいものだった。

いや、声だけではなく二人はすべてが対照的だった。きらびやかな顔立ちのアドレイドに対してダーラは素朴な顔立ちで、表情の乏しさがそれをさらに際立たせている。

服装も華やかで明るい色を基調にしたアドレイドとは真逆で、黒に近い紫色のドレスを身につけとつており、ともすれば無表情さと相まって喪服に見間違えそうなほどだ。

だが不思議と、彼女から冷たさを感じることはなかった。

「こちらこそどうぞよろしくお願いします」

挨拶を交わす二人を満足げに見ながら、アドレイドが不意に「フッフッフ……」と妙な笑いを漏らし始めたので、思わずダリルは首を傾げた。

「あの、どうかされました？」

「いや、失礼。ただ、私好みの二人が並んで実に壮観な光景だと思っただけさ」

「え？」

うっとり微笑んで言うアドレイドの言葉に、ダリルはきよんとんとして、ダーラは心底辟易した顔で眉根を寄せた。

そんな二人の反応などお構いなしに、アドレイドは恍惚交じりに嘆息した。

「ああ……っ、何と可愛らしい。まるで野の端で控えめに咲く野花のようだ。叶うことならまとめてお持ち帰りしたい……っ」

「誘拐罪で連行されますよ」

微塵みじんも冗談の気を見せず冷淡に言うダーラに、アドレイドの頬がさらに緩む。

「はははっ、すまない、妬やかせてしまったね」

「妬やいていません」

「大丈夫だよ。私は生涯ダーラ一筋さ」

「叶うことなら私も期限付きの契約結婚でありたかったものです」

ダリルへの嫌味などではなく本心から漏れた独り言のように、ダーラは溜め息をつきながらそう言った。

「そんな寂しいことを言わないでくれ。永遠の愛を誓った仲間じゃないか」

「誓わされた、の間違いです」

「だが、誓った事実には違いない」

肩を抱き寄せにこりと微笑むアドレイドに、ダーラは心底うんざりしたような表情を見せたが、溜め息を呑みこむような間を置いてからダリルのほうへ顔を向けた。

「……ダリル様」

「は、はいっ」

不意に名前を呼ばれ、ダリルは反射的に背筋をピシッと伸ばす。

「カーティス様は紳士的な人格者ですが、ハウエル公爵家の血筋の人間はこのように強引なところがありませんので、どうぞお気をつけて」

アドレイドを軽く睨みつけながら忠告するダーラに、どう返していいか思いあぐねる。とその時、くすくすと笑う可憐な笑い声が後ろから聞こえ、ダリルは振り返った。

「ひどいですわね。それでは私もその強引な血筋を引いているということかしら」

そこにはダリルと同年代と思われる、褐色肌の女性が立っていた。

「レイラ。体調は大丈夫なのか」

カーティスが短く声をかける。音量は控えめだが、その響きには相手を気遣う思いがしつかりと

滲んでいた。

「ええ、お兄様。今日は本当に調子がいいんです」

レイラと呼ばれた女性は、にこりと柔らかく答えた。カーティスは何か言いたげに唇を動かしたが、結局、口を閉じた。

その様子を察したレイラが、言葉を継ぐ。

「ふふ、心配なさらなくても大丈夫です。念のため、レティシア様に休むためのお部屋を準備していただいていますから」

「……そうか。それならいい」

ホッとしたように、カーティスの目元がわずかに緩む。それだけで、彼がどれだけ妹を大事に思っているかがダリルには伝わってきた。

「やあ、レイラ。体調がいいようで何よりだ」

「ええ、おかげさまで。アドレイド叔母様は相変わらずのようですね。元気があり余っているようで羨ましい限りです」

アドレイドと軽い会話を交わしてから、彼女はダリルに微笑みを向けた。

「初めまして、レイラ・ハウエルです。兄がいつもお世話になっております」  
淡紅色の目をにこりと細めレイラが挨拶をする。

年齢はダリルの三つ上と聞いていたが、それでも大きな瞳が印象的な、どこか幼さが残る可憐な顔立ちが美少女と言って差し支えないだろう。

「ダリル・ハウエルです。よろしくお願ひします」

「ふふ、ダーラ様が仰るように強引などところがあるかもしれませんが、どうぞよろしくお願ひします」

悪戯いたづらつぼく笑うレイラに嫌味な感じはなかったが、ダーラは気まずかったのか「……強引なのはハウエル公爵家の男性に限ります」とぼそりといつけ加えた。

そんなダーラを見て、レイラがくすりと笑う。

「あら？ アドレイド叔母様はいつ男になったのかしら」

「ほとんど男性みたいなのですよ、あの人は」

「本当にダーラ様は可愛いですわ。さすがアドレイド叔母様、女性を見る目がありますわね」

「ハハハッ、そうだろう、そうだろう。もつと褒めてくれて構わないぞ」

得意げに胸を張るアドレイドだったが、視線の先に何かを捉えて目を見開く。しかしすぐに相好あいきょうを崩すと、腕を上げて大きく手を振った。

「カイル！」

嬉しそうに名前を呼ぶアドレイドの声に、ダリルやカーティス、レイラたちが振り返る。

そこには手洗いから戻ってきたカイルが立っていた。しかしなぜかその表情は暗く、気まずげに目を伏せていた。

どうしたのだろうとダリルが心配になっていると、カーティスがサツと足早にカイルのもとへ歩み寄った。そして優しく肩を抱き寄せながら、こちらへ戻ってきた。

「みんなお前に会えず、ずっと心配していたんだ。挨拶しなさい」

決して強要する風ではなく、柔らかな声で促して、カーティスはカイルの背をそつと押した。

カイルは唇を引き結んだまま緊張した面持ちでゆつくりと顔を上げ、ダリルと目が合うと、安堵したように強張おぼった頬をやや緩める。そして、次には背筋を伸ばしてしっかりと視線をアドレイドたちに巡らせた。

「お久しぶりです。長い間、会うのを断ってしまい申し訳ございませんでした。いろいろとご心配おかけしました。今日はゆっくりお話しできたらと思っております」

声にかすかな震えは帯びているが、怯ひどむ気持ちを奥へと押しやるようにしてそう言い切った。その言葉を聞いて、ダリルはようやくカイルがなぜ気まずそうな表情だったのかが分かった。

恐らく、痣あざが顔にできてからアドレイドたちと会うことを拒んでいたのだろう。もしかすると、拒絶に近い強さもあったのかもしれない。その負い目から、強く緊張しているのだろう。

今日の夜会でアドレイドたちと会うことに、カイルがどれだけの勇気を要したかは想像に難くない。にもかかわらず、夜会前に緊張していたダリルを気遣い、力強く励ましてくれた。そんなカイルを思い出して、ダリルは目頭が熱くなった。

カイルの健気な姿に胸を打たれたのはダリルだけではなかった。

「カイル……！」

レイラが膝をつき、カイルをぎゅっと力強く抱きしめる。

「謝る必要なんてないわ。あなたは子供なんだから、私たち大人に気を遣う必要は少しもない

感極まって震える声でレイラが言うと、アドレイドがそれに同意するように頷いた。

「レイラの言う通りだ。子供のうちからそんなに気を遣ってはいは身が持たんぞ。会いたくない時は会いたくない。会いたい時は会いたい。それでいいのだ」

湿っぽさを散らすようにアドレイドがカイルの頭を豪快な手つきで撫でる。

「私を見てみる。気遣いゼロで生きているからこの若々しさを保っているのだ」

「……アドレイド様のような極端な生き方はおすすめしませんが、今はこの人のこういう厚かましさを見習うべきですよ」

ここにきてダーラが初めて少しではあるものの微笑んだ。それぞれの優しさをその一身に受けたカイルは、目尻に涙を浮かべ小さく頷いた。

「——さて、会わなかった間の話をたっぷり聞かせてもらおうじゃないか」

明るくアドレイドが言つて、カイルにウィンクを送る。

アドレイドに促され、カイルは気恥ずかしげに、しかしどこか嬉しそうに学園でのことを話し始めた。その間は誰もが真摯に耳を傾けており、表情は皆一様に微笑まじげで、こうしてまたカイルと話せる喜びを噛み締めているようだった。

その様子を見ながら、ダリルは顔を綻ばせた。

夜会に出る前までは、この結婚について何か物申されるのではないかと心配していたが、彼女たちの今の様子を見てそれは杞憂だったと確信した。

こんなにも優しい言葉と眼差しをカイルに向ける彼女たちが、身分差などといったことを理由に、ダリルを邪険にするわけがなかった。

優しさに満ちたその場の雰囲気は、血の繋がらないダリルやネイトにとつても心地よいもので、自然と笑みが零れたのだった。

カイルとの久しぶりの歓談をたっぷり楽しんだ後、アドレイドとダーラは他の貴族へ挨拶に、カーティスは商談相手に呼ばれ別室に、それぞれ散っていった。

残ったダリルたちは、その後も和やかに談笑していた。

レイラとは初対面だが、歳も近く彼女の気さくな性格のおかげで、ダリルたちはすぐに打ち解けることができた。

「ふふっ、それにしてもダリル様はすごいですわね」

ひとしきり話したところで、不意にレイラが小さく笑つて言う。

ダリルは首を傾げた。

「すごいって、何がですか?」

これまでの会話で、褒められるようなことは少しもなかったはずだ。社交辞令にはあまりに脈絡がなく、また言い方に屈託がなかった。

「あら、無自覚なんですか? あんなにお兄様を骨抜きにしておいて」

「骨抜き!? いやいやっ、骨抜きになんてしていませんよ」

からかうような表情から冗談だと分かっている、まるで自分がカーティスを籠絡したかのような言葉の響きに、ダリルは慌てて首を横に振る。その慌てっぷりを見たレイラは、くすりと笑った。「骨抜きにしていますよ。公の場であんなにとろけた表情を見せるなんて……、ふふっ、ごめんなさい。思い出してまた笑っちゃいました」

レイラが口元に手を添えて無邪気に笑う。しかし、ダリルには彼女がなぜそこまで笑うのかが分からなかった。

もちろん、笑みの柔らかさから他意がないことは明らかだ。だが、それでも思い出し笑いするほど露骨な表情をカーティスは見せたのだろうか。確かに以前に比べれば若干、表情は柔らかくなったかもしれないが、とろけた表情というのは些か言いつぎのような気もした。

「レイラ叔母様、お言葉ですが、お父様は笑うほどしまりのない顔はしていませんよ」

カイルが不服そうに反論する。レイラがカーティスを貶めているわけではないことは分かっているだろうが、敬愛する父を笑われるのは面白くないのだろう。

「あらあら、ごめんなさい、カイル。だけど別にお兄様を侮辱しているわけではないのよ」

少しむくれたカイルの頭を撫でながら、レイラは謝り弁解した。

「もちろん、お兄様はしまりのない顔なんてしてはいないわ。ただ、お兄様は気を許した身内には優しい顔を見せるけれど、公の場ではハウエル公爵家当主としての体面を守って滅多に私的な感情を表に出したりしないでしょう？ ……だから今日、ダリル様を見つめる柔らかな表情を見てすごく驚きました」

レイラは視線をダリルのほうへ向けた。

「でも、私はとてもいいことだと思います。お兄様は少し真面目すぎるから……。それにお兄様の愛想のなさは社交界ではマイナスポイントですわ。だからあのお堅い冷徹仮面を崩してくれたダリル様には感謝しています」

おどけながらもレイラは朗らかに話す。冗談めかした言い方だが、感謝の気持ちが深く伝わってきて、ダリルは照れくささから顔を赤くした。

「まあ、兄さんの並外れた可愛さを前にしたら、無表情でいられるわけがないからね」

ネイトが得意げに腕を組んで頷く。彼の言葉に、ダリルとカイルは溜め息をつき、レイラは目を丸くした後、すぐに嘔き出した。

「ふふっ、ダリル様に骨抜きにされているのはお兄様だけではないようですね」

からかう風ではなく、純粋に楽しそうに言われたので、ダリルは一層、顔を赤らめた。

「レイラ様！」

不意に親しげにレイラを呼ぶ若い女性の声が聞こえ、四人は視線をそちらに向ける。数人の若い令嬢がこちらに駆け寄ってきていて、レイラは微笑みながらその令嬢たちに軽く手を挙げた。

「あら、お久しぶり」

「お久しぶりです、レイラ様」

「お加減はもう大丈夫なのですか」

「ええ、長く休養していたからすっかり元気になりましたわ」

和気藹々と語りうレイラと令嬢たちだったが、ひとりが本題に入るかのようにしておもむろに口を開いた。

「ところで、そちらの殿方たちは……」

令嬢たちがちらりとこちらに視線を向ける。正しくは、ネイトのほうに。彼は黙っていれば非の打ち所のない美青年なのだ。年頃の乙女たちの注目がそちらに向くのも無理はない。

「紹介しますわね。こちら、ネイト・コッド侯爵令息です」

「初めまして、ネイト・コッドと申します」

ネイトが秀麗な笑みを浮かべ挨拶をすると、令嬢たちの頬が仄かに赤く染まった。

とても先ほど兄に対して呆れるくらいの心酔を見せた人物と同一とは思えない。その猫被りっぷりにダリルは苦笑してしまう。

「そして、こちらが私の甥、カイル・ハウエル公爵令息ですわ」

しゃがんでカイルの両肩に手を置き紹介する。その表情は自慢の甥を誇るようなものだった。

「初めまして。カイル・ハウエルと申します」

大人びた態度で挨拶をするカイルに、令嬢たちが声を弾ませた。

「まあ、可愛い！」

「すっかりされているのね。さすがレイラ様の甥御様」

「ふふふ、ありがとう」

まるで自分が褒められたようにレイラは嬉しそうに笑った。

「そしてこちらが、お兄様の再婚相手、ダリル様ですわ」

レイラがダリルのほうへ手のひらを向けてそう言うのと、令嬢たちは目を見開いた。

「まあ、あなたが……!!」

興味津々といった感じで令嬢たちの目が輝いた。その目を見ていると、懇親会で婦人たちが詰めてかかってきた時の記憶が蘇って、思わず身構える。

しかし逃げる隙もなく、令嬢たちはダリルを囲んだ。

「お噂通り素敵なお方！」

「あのハウエル公爵様の心を射止めるなんて、すごいですわ！」

「きつと素敵な馴れ初めがあるんでしょうね！」

好奇心に満ちた瞳は、明らかに甘く壮大なラブロマンスを期待していて、ダリルはたじろいでしまふ。

「い、いえ、そんな大層なもの……」

「まあ、ご謙遜なさって」

「でも、この謙虚さ、亡くなったクリスティーナ様一筋だった公爵様を振り向かせたのも納得ですわ」

うんうん、と頷く彼女たちに顔を引き攣らせながら、ダリルは内心、首を傾げた。

あれだけの美貌と地位がありながら後妻に名乗りを上げる者がいなかったのは、ハウエル公爵家の呪いを恐れてではなかっただろうか。

彼女たちの反応に少し違和感を抱いていると、くすり、と妙に輪郭のはっきりした女性の笑い声が耳に届いた。

「——あらあら、ハウエル公爵家の呪いを恐れて誰も名乗り出ることができなかった、の間違いはありませんこと？」

上品で柔らかな声音だが嫌味っぽい物言いに、皆、眉間に皺しわを寄せて声の主のほうを見た。

そこには、真つ白なレースのドレスに身を包んだ、白銀の髪を持つ美女が立っていた。胸元に口ザリオに似た銀色のネックレスが揺れており、その姿はまるで絵画の中から出てきた女神のようだった。その美しさのあまり、ダリルは思わず息を呑んだ。

周りの令嬢たちは彼女のことを知っているようで、あからさまに顔を顰めた。

白銀の髪はダリルに向かって、にこりと微笑んだ。

「はじめまして、ダリル様。私、オネアゼア国より来ました、ヴィルガ教のカーリーナ・オルフィーノと申します」

「ヴィルガ教……」

その名前には聞き覚えがあった。

遙か西の国、オネアゼア国では三百年に一度、神より癒やしいよの力を与えられた聖女が現れるという言い伝えがあり、その聖女が十数年前にヴィルガ教の教団本部を訪れたという。

彼女の力は本物で、あらゆる病気やケガ、そして呪いをその力で癒やしてきた。だが、その力は相手の病気やケガが死に近ければ近いほど彼女の体力を多大に削るため、頻繁には使えないらしい。

大金を出す貴族にのみにその力を使っているという悪評もあり、あまりいい噂を聞かない教団だ。

聞き慣れない遠くの国の話であり、聖女の名前までははっきりと憶えていないが、確かその聖女は美しい白銀の髪かみの持ち主だということはダリルの記憶にあった。

「もしかして、聖女様ですか？」

緊張しながら問うと、女はふふつと可憐に微笑んで頷いた。

「一応、そのように呼ばれていますわ」

彼女の答えに、ダリルは自分で聞いておきながら驚いた。聖女というどこかお伽話おとぎばなしめいた存在が目の前まへにいることに、ただただ哑然とするばかりだった。

すっかり呆だまけているダリルに代わって、気の強そうな令嬢がフンと鼻を鳴らした。

「あら、でも聖女様だって、ハウエル公爵家から治癒の依頼を受けたにもかかわらず、呪いを恐れ断ったそうじゃありませんか」

挑発的に令嬢が言うと、カイルは目を瞠みはつてカーリーナを凝視する。しかし彼女は柔なやかな微笑みを崩さず、ゆつたりと答えた。

「ふふつ、そういう風に噂が広がっているのですね。まったく噂とは嘘うそデタラメばかりですわね」

「デタラメ？ でも、断ったのは事実でしょう？」

令嬢が棘とげのある言い方で、問いかける。

「誤解ですわ。ハウエル公爵家の依頼に応えられなかったのは、これまでオネアゼア国周辺で戦争が絶えず兵士たちの治癒に駆け回っていたため、決して呪いを恐れたことなどありませんわ。そ

れに――」

そこで言葉を切って、カリーナは令嬢たちを一瞥した。

「傷ついた兵士たちを放ってハウエル公爵家へ駆けつけるなんて、まるでお金で命の選別をする守銭奴のようではありませんか」

他意を含んだ口振りで言って、たおやかに微笑む。

恐らく、大金を出す貴族にのみその力を使う、という噂は本人の耳にも届いているのだろう。その噂を、そしてそれを信じこんでいる者たちの単純さを揶揄するような物言いだった。

令嬢たちがすぐに言い返せずにいると、カリーナはふう、とわざとらしいほどに憂いを帯びた溜め息をひとつ漏らした。

「嘆かわしい限りですわ。皆様になんか誤解を与えてしまうのもすべては私の無力さのせい。もし、私の力が他の者にも分け与えられたら、世界中からやってくる救いを求める声すべてに応えることができるのに、と悔しくてなりません。……カイル様」

カリーナはカイルと目線を合わせるように膝を折り、向き直る。

「私が無力なばかりに、カイル様のもとへすぐに参れず、申し訳ございませんでした。とても辛い想いをされたでしょう。ずっとそのことが気がかりだったのです」

眉尻を下げ、憐憫に満ちた表情で謝るカリーナに、カイルは少し驚いていたが、すぐに大人びた微笑を浮かべて答えた。

「いえ、構いませんよ。カリーナ様もいろいろ事情があつたようですし。それに、今はむしろ感謝

すらしています」

「え？」

思いがけない言葉に、カリーナだけでなくダリルたちも目を丸くした。カイルは笑みを深めると、ぐいっとダリルの腕を両手で抱き寄せた。

「だって、あなたがすぐに来て僕の痣を治していたら、ダリルに会えなかったかもしれないじゃないですか。……確かに辛いこともあつたけど、あの痣は僕とダリル、そしてお父様を引き合わせるものだったって、今では思いません」

清々しく言い切って、カイルはカリーナを真っ直ぐ見据えた。その瞳には哀れみは不要だと同情的な謝罪を突き返す気丈さがあつた。

ダリルは思わず目頭が熱くなった。

辛い過去をダリルとの出会いと絡めて前向きに捉え直してくれていることも嬉しかったが、痣のせいで傷つきすべての人を拒絶し部屋に引きこもるカイルの姿が見る影もなく、その成長が嬉しくて堪らなかつたのだ。

カリーナは少しの間目を瞠っていたが、すぐにたおやかな微笑を口元に取り戻した。

「ではあの痣もダリル様との出会いも運命だったということですね。ふふっ、素敵ですわ」

そう言って、カリーナはスッと立ち上がった。

「私もその運命を信じますわ。私がカイル様の治癒に向かえなかつたことも運命。そのことでカイル様とカーティス様がダリル様と仲を深めたのも運命。そして、今日こうして私がお二人にお会い

## 立ち読みサンプル はここまで

できたことも、きつと運命。そうに違いありませんわ」

にこりと微笑んでカイルの言葉にカーリーナが同意する。

だがダリルは、どこか含みを感じる口ぶりに違和感を覚えた。うまく言葉にはできないが、彼女が繰り返す口にする“運命”と言う言葉が妙に引っかかるのだ。

「聖女様」

それについて問おうとした時、三十代くらいのも、カーリーナと同じネックレスをつけた神官らしき白い服の男が、厳粛な声で割り入ってきた。

「お話し中、失礼します。ウルド侯爵がお呼びです」

「あら、そう。すぐ行くわ」

カーリーナはにこやかに答えて、またダリルのほうへ向き直った。

「ごめんなさい。私はここで失礼しますわ。本当はもっとゆっくりお話がしたかったですけれど——でも、きつと近々お会いすることになると思いますわ」

「え？」

やけに確信めいて言うので、ダリルは思わず聞き返す。しかし、カーリーナは意味深な微笑みを返すだけで、そのまま彼女を呼びに来た男とダリルの前から立ち去った。

「……ッ、噂通り嫌な感じの方ですわね」

先ほどカーリーナに食ってかかった令嬢が憎々しげに言って、カーリーナが消えた方向を睨みつける。他の令嬢たちも、それにならうように憤然とした様子でココココと頷いた。

「ええ、本当に。聖女の力を利用して各国の貴族に取り入っているらしいですわ」

「まったく、そのどこが聖女なのかしら」

「平民上がりの娘でしょう？ 根が下品なのよ」

本人がいなくなった途端、悪口が湧き上がる。その刺々しい雰囲気きんきんがどうにも居心地悪い。カイルとネイトと目配せし、その場を去ろうとしたダリルのもとに「ダリル様も気をつけたほうがよろしいですわよ」と名指しで忠告が飛んできた。

「気をつけるって聖女様にですか？」

「ええ、何でもあの聖女様、カーティス様を狙っていたらしいですから」

ひとりの令嬢が声を潜め、忌まわしげに言う。思いがけない情報に、ダリルは目を瞠みはった。

「本当ですか？」

「ええ。後妻の座も狙っていたとか」

「きつとダリル様のことをあまりよく思っていないと思いますわ」

「へえ……、そうなんですな」

カーリーナへの嫌悪を露わにしながら忠告してくる令嬢たちに、ダリルは当たり障りのない相槌を打ちながら曖昧な笑みを返した。

確かに、口元に浮かぶたおやかな微笑は本心を隠すための作りものめいていて掴みどころがない印象を受けたが、少なくともこちらへの敵意は感じられなかった。

(フィルの敵意がすぎたから感覚が鈍ってるのかな……)